

和歌を読むことの意欲を高めるための一方策
～評論的な文章を書く活動を用いて～

1. 主題設定の理由

文章に表現された人々の思いを共有することは、幅広い視野を持ち、新しいものを創り上げようとする姿勢を養うために大切なことである。生徒が主体的に多くの作品に触れ、凝縮された言葉から内容や心情を読み取る力をつけさせたい。

三十一音という凝縮された言葉で表現されている和歌は、多くの人々の思いや考え、価値観に気付くことができる教材として適していると考えた。教科書教材にある「万葉集・古今和歌集・新古今和歌集」は、その時代に生きた人々の生活の息吹を現代に生きる私たちに伝えてくれる古典作品である。三大和歌集を軸に、2年時で学習した「近代の短歌」を導入として用い、さらに「現代の短歌」にも触れる。幅広い時代の和歌に触れ、意欲的に歌人の思いを読み取る力をつけるために、本主題を設定した。なお、本単元での「読む」とは、読んで味わい、内容を捉えることである。自らの考えをもつために、文章を外側から見て評価・評論するという手段を選んだ。一般的に評論文とは、物事のよしあし・優劣・価値を書いた文章を指すが、本単元では読み取った和歌の「価値」を表現できればよいので、「評論的な文章」と表記する。

2. 研究仮説

- (1) 和歌を読むにあたりテーマを捉えながら多読をすれば、和歌の世界に親しむことができ、和歌を読む意欲が高まるだろう。
- (2) 「古典の歌と近現代の歌を選択して評論的な文章にまとめ、読み合う」という言語活動を行えば、和歌そのものの持つ意味や歌人の心情をより深く味わい、多様な読みができるだろう。

3. 研究内容

- (1) 三大和歌集と近現代の短歌の多読を通して、和歌への関心・意欲を高める。
- (2) 三大和歌集の和歌と近現代の短歌の中から、好きなテーマで和歌を選択して評論的な文章にまとめ、読み合ってより内容を掴んでいる評論的な文章を共有する。

4. 研究のまとめ

- (1) 和歌をテーマごとに分類しながら読み取ったことで、個人よりも多く多読することができ、時代を限定せずに和歌に触れたことで読む意欲が高まった。
- (2) 評論的な文章にまとめることで、和歌の感想にとどまらない深い読み取りができた。できあがった文章を読み合うことで、生徒どうしの読み取りの違いの気付きがあった。

1. 研究主題

和歌を読むことの意欲を高めるための一方策 ～評論的な文章を書く活動を用いて～

2. 設定の理由

中学時代はものの見方や考え方に広がりが見え始め、生きていくうえでのさまざまな問題にぶつかり始める。この時期に、長い時代の評価を経て残されてきた作品とそれを受け継ぐ現代の作品に接し、そこに表現された人々の思いを共有することは、幅広い視野を持つためにも、さらに新しいものを創り上げようとする姿勢を養うためにも大切なことである。多くの人々の考え方や価値観に触れ、自分の考えを形成していくことが生きる力になる。生徒が主体的に多くの作品に触れ、凝縮された言葉から内容や心情を読み取る力をつけさせたい。そこで、人々の思いや考えが表現されている作品多く触れるために、三十一音という凝縮された言葉で表現されている和歌が適していると考えた。その時代に生きた人々の生活の息吹を現代に生きる私たちに伝えてくれるものとして、古典作品は有用である。教科書教材にある「万葉集・古今和歌集・新古今和歌集」を軸に、2年時で学習した「近代の短歌」を導入として用い、さらに「現代の短歌」にも触れる。幅広い時代の和歌に触れ、意欲的に歌人の思いを読み取る力をつけるために、本主題を設定した。

第3学年における学習指導要領の「C読むこと」の目標に、「目的や意図に応じ、文章の展開や表現の仕方などを評価しながら読む能力を身に付けさせるとともに、読書を通して自己を向上させようとする態度を育てる。」とある。1・2年時では古典を学習した後に、古典作品から感じたことを自分の体験と照らし合わせて、文章にまとめるという活動を行っていた。しかし、個々の学びの中だけで終止しており、その読み取りの内容を他者と共有していく機会は少なかった。もちろん古典作品にとどまらず、和歌は言葉のリズムや表現の省略や飛躍を伴って、読み手にさまざまな解釈を生むことがある。だからこそ本単元では、評論的な文章にまとめる手段を取り、和歌を読んで情景や感動を捉える力と歌人の価値観に気づく力を養う。教育出版の教科書の巻末に佐佐木幸綱さんの「古典の歌、現代の歌」がある。これは学習指導要領の評価・評論の学習をするにあたって最適なサンプルである。生徒は評論的な文章を書くことで読み取りをまとめることができ、また最後に他者がまとめた評論的な文を読むことで、内容の捉え方や新たな視点で読む力を身に付けられるよう学習の展開を計画した。

なお、本単元での「読む」とは、読んで味わい、内容を捉えることである。自らの考えをもつために、文章を外側から見て評価・評論するという手段を選んだ。一般的に評論文とは、物事のよしあし・優劣・価値を書いた文章を指すが、本単元では読み取った和歌の「価値」を表現できればよいため、「評論的な文章」と表記する。

〔生徒の実態から〕

生徒たちは、読書習慣がよく身に付いており、文章を読むことに対して意欲的であった。しかし、2年の2月に受けた領域別テストでは文学的文章の読み取りの項目の正答率が61%、説明的文章の読み取りの項目が40%、短歌の内容理解の項目の正答率が31%という結果で

あった。特に筆者の考えの読み取りや、人物の心情に対する項目では正答率が低い傾向がある。古典に関しての興味・関心は元来持っているので、生徒が主体的により多くの作品に触れ、凝縮された言葉から内容や心情を読み取る力をつけさせたい。

古典に関するアンケートの結果 ※実施人数34名（2017年5月に実施）

（1）古典の学習にどのくらい興味・関心がありますか。

とてもある…12% ややある…56% あまりない…26% 全くない…6%

主な理由 とてもある…昔の人の考えや見方などがわかるから。

ややある…現代とは違う新鮮な感じがあるから。

あまりない…読みにくいから。

ない…意味がよくわからないから。

（2）和歌を勉強する上で、おもしろいと感じることは何ですか。

- ・リズムにのっていること。
- ・長すぎない文字数でしっかりまとまっていること。
- ・詠んだ人の感じたことや思ったことが表されていること。
- ・人によって考えが違ふこと。

（3）和歌を勉強する上で、難しいと感じることは何ですか。

- ・意味を理解すること。
- ・読み方がわからないこと。

（4）古典を勉強するときに、絶対に必要なことはなんだと思いますか。

- ・古語を知ること。
- ・当時の時代の知識。
- ・現代文に直すこと。
- ・その時代の人は何を言いたかったのか知ること。

アンケートの結果から、生徒自身も古典の読み取りに対する課題意識があるとわかる。約3割の生徒が興味・関心をもてない理由は、情景や歌人の思いを古語から読み取ることが難しいからだと分かった。

3. 研究仮説

仮説1 和歌を読む際にテーマを捉えながら多読をすれば、和歌の世界に親しむことができ、和歌を読む意欲が高まるだろう。

仮説2 「古典の歌と近現代の歌を選択して評論的な文章にまとめ、読み合う」という言語活動を行えば和歌そのものの意味や歌人の心情をより深く味わい、多様な読みができるだろう。

4. 研究内容

- (1) 三大和歌集と近現代の短歌の多読を通して、和歌への関心・意欲を高める。
- (2) 三大和歌集の和歌と近現代の短歌の中から、好きなテーマで和歌を選択して評論的な文章にまとめ、読み合ってより内容を掘めている評論を共有する。

5. 研究の実際

研究の経過における成果と課題

①『竹取物語』の続きを作ってみよう。」(第1学年 2学期)

竹取物語を読み、5人の貴公子が去った後の物語の続きを作る活動をした。古文を読み、話の流れが読み取れている生徒とそうでない生徒の差が大きく、読み取れていない生徒は繋がりが無いSFのような話になってしまった。課題は、竹取物語の良さとは何かを問い、人間の情愛を活かして書こうという視点を与えることである。【資料1参照】

②『枕草子』を読み、自分だけのものづくりを作ろう。」(第2学年 2学期)

第1ステップとして春はあけぼのを読んだ上で1つ季節を選び、その季節について清少納言の書き方を真似して自分だけの春はあけぼのを作った。第2ステップとしてうつくしきものを読み、自分のものづくりを作った。課題は、題材の自己決定を古典に反映できたかが曖昧になってしまったことである。【資料2参照】

③「近代の俳句を読み、それぞれの俳句の良さを見つけよう。」(第3学年 1学期)

俳句の特徴を学び、さまざまな俳句の良さを見つけられるように、視覚・聴覚・触覚などに注目させながら読ませた。成果は、14句を読み進めるうちに着目ポイントを抑えつつ、自分の他の句と比較をしながら良さを示すことができるようになったことである。課題は、生徒の意見が表現技法と視覚表現に偏ってしまいがちであったことである。他の句との比較を通して、句の内容にもう一步踏み込める視点を持たせるべきであった。

④「修学旅行の俳句を作り、句会を開こう。」(第3学年 1学期)

言葉を選びながら、俳句という少ない音数で表現することを意識させた。また、句会を行うことで表現の仕方や使われている言葉を評価するという目的を持って読ませることができた。【資料3参照】

⑤「地の文との関係を見つけながら『おくのほそ道』の俳句を読もう。」(第3学年 1学期)

多読に繋げるために、教科書の本文を学習した後、一人一冊『おくのほそ道 ビギナーズ・クラシックス』を渡し、教科書以外の内容にもより広く触れさせた。各章で詠まれた俳句は地の文のまとめであることをおさえることで、凝縮された言葉の意味を理解しようとする姿勢が見られた。また、多読することで古典に対する関心も深まった。課題点は、読んだ内容を確認することで多様な読みがあることを知るところまで指導することである。

今回の実践研究の内容

これまでの実践の成果と課題から、3年次からは多読を通して読む意欲を高めるようにした。本単元では、和歌を通して時代とともに変化する歌人の心情や考え方、反対に変化しないものの見方などを読み取るために、3つの段階を踏んだ学習計画を立てた。1次では和歌の基礎知識を身に付け、2次で古典の歌と近現代の歌を並行読書で多読し、3次では読み取った内容をテーマ分類した上で好きなテーマとそれにそった和歌を選び、評論的な文章を用いて読み取ったことをまとめる。

(1) 単元名 古典の歌と近現代の歌を評論にまとめ、歌人の思いを捉えよう。

(2) 題材観

三大和歌集と言われる本教材は、それぞれの時代背景や人々のものの見方や考え方を反映して、歌風も特徴をもっている。「万葉集」には、和歌の5種類の形式が見られ、さまざまな階層のさまざまな地域の人々の歌が採られていることが最大の特徴であると思う。ありのままの率直な表現からは、当時の人々の生活がかいま見られ、生きている実感が伝わってくる。「古今和歌集」の歌は、感動をさまざまな表現技法を用いて表現しており、やや客観的な雰囲気強く、強い感情よりもじわじわと心にしみてくるようなしみじみとした趣が感じられる。「新古今和歌集」では、幽玄という特徴を持ち、色彩的・絵画的な美しさを感じさせる言葉で思いを包み、印象はあでやかである。自然や人間への思いは、時代や一人ひとりの個性によってさまざまに異なり、変化していくものであり、表現の仕方も同じではない。近現代の短歌を並行して読ませることで、時代や社会のありようの違いや、現代に生きる私たちと共通する気持ちなどを読み取れるようになることを期待できる。

(3) 指導観

生徒の実態から、和歌の世界をすぐに想像することは困難であると予想される。和歌の内容を読み取らせ味わわせるには、まず読み慣れることが大切である。そのために、まずは和歌の基礎知識や現代仮名遣いの確認をする。読む意欲をもたせるために、ビギナーズ・クラシックスを用いて多くの和歌に触れながら学習を進めていく。この教材で学習する指導事項に「文章を読んで人間、社会、自然などについて考え、自分の意見をもつこと。〔C(1)エ〕」とある。近現代の短歌を並行読書で触れさせることで、現代との比較をしながらさらに深く歌人の思いを捉える場面を作る。読む力をつけるために評論的な文章にまとめるという活動を行うことで、和歌の価値を見出していけるようにする。

(4) 指導目標

関心・意欲・態度	・和歌に関する図書を多読し、評論にまとめようとしている。
読むこと	・和歌の表現上の工夫に注意して読み、自分の意見をもつことができる。〔C(1)エ〕
伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	・和歌やその解説を引用して文章を書くことで、その世界に親しむことができる。〔伝ア(ア)〕

(5) 評価規準

関心・意欲・態度	・和歌を多読し、テーマを決めて評論にまとめている。
読むこと	・選択した和歌の表現に着目して読み取り、自分の意見をもつことができる。
伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	・和歌やその解説を引用して文章を書くことができる。

(6) 指導全体計画(10時間扱い)

時配	学習内容と活動	指導や支援の手立て (・指導上の留意点, ○支援, ☆評価)
1 次	1 ○短歌の形式や、句切れ、表現技法について確認する。 ○現代の短歌と古典の和歌を取りあげて音読する。 (○本時以降、朝読書の時間等を使って近現代の短歌を読み進める。)	・基礎知識の確認のために、昨年度学習した「近代の短歌」を例に挙げる。 ・多読のために、新聞歌壇や『現代万葉集』等のコピー、資料集を準備しておく。 ○朝読書のために、市立図書館から30冊、自校の図書室から20冊の図書を学年室前の廊下に配置しておく。【資料11参照】 ・興味のある短歌は、ノートにメモさせておく。 ☆短歌の基礎知識を確認し、意欲的に音読している。(観察)
2 次	2 ○資料集を読み、万葉集・古今和歌集・新古今和歌集の特徴を知る。 ○教科書に掲載されている14首の和歌を音読する。 3 ○教科書教材の14首の和歌について読みとる。 ・誰の視点か。 ・どんなテーマか。	・資料集から、成立した時代や撰者、文学の特徴などをノートにまとめさせる。 ・現代仮名遣いに注意しながら、挙手した生徒の追い読みをさせることで、読む意欲を高める。 ☆三大和歌集の特徴を理解し、14首を音読できる。(ノート・観察) ・ビギナーズ・クラシックスの解説を参考にさせる。 ○キーワードとなる言葉が歌のテーマであることを伝える。 ☆解説を参考にテーマを書いている。(ノート)
3 次	4 ○教科書に掲載されている和歌以外に触れる。(それぞれの和歌集のビギナーズ・クラシックスを各自で読む。)	・古文の原文が読めない生徒のために、それぞれの和歌集のビギナーズ・クラシックスを3冊1セットにして全員に配布する。 ・生徒個々の意欲を削がないために、どの和

	○興味を持った和歌を1首選び、その和歌がどんなテーマで書かれているかをノートに書く。 ①和歌 ②和歌集名 ③ビギナーズ・クラシックスのページ数 ④読み取ったテーマ(キーワード)	歌集を読むかは各自に任せる。 ☆ビギナーズ・クラシックスを読み、興味をもった和歌を見つけることができる。(ノート)
5	○各自が選んだ和歌をグループで共有し、それぞれの和歌がどんなテーマで書かれているかを、グループで分類する。【資料4参照】 ○グループで分類したプリントの内容をクラスで共有する。 ○古典の和歌と近現代の短歌を読んで感じた違いや共通することを見つける。	○4～6人のグループを組み、各自で読み取ったテーマの根拠となる表現が明確になっているかを検討させ、付箋を用いてテーマの分類をさせる。 ○さまざまなテーマに分類できることに気づかせる。(後に評論的な文章を書くためのテーマを決める時に活用できるようにさせる。) ○並行読書をしている近現代の短歌については、興味を持った和歌をノートに書いたときと同じようにすることを助言し、個別に支援をする。【資料5参照】 ☆ビギナーズ・クラシックスを読み返し、どんなテーマで書かれているかを考えて分類できている。(観察・ワークシート) ☆昔と現代の普遍性や違いに気づくことができる。(観察)
6	○古典の和歌と、近現代の短歌から読み取ったことを発表する。 【7ページ下部参照】 ○教科書P.310の評論を読み、古典の和歌と近現代の短歌を使って、評論的な文章を書くという単元のゴールを知る。【資料6参照】	・様々な視点から読ませるために、テーマ別に分類した古典の和歌と近現代の短歌とを読んで感じた違いや共通することに気づかせる。 ○和歌の価値を評論にまとめるという意識をもたせ、再度読ませる。 ☆古典の和歌と近現代の短歌と違いや共通点などを読み取ることができる。(発表・ノート)
7	○再度、教科書P.310にある評論を読み、教員のサンプルを見て、学習内容を理解する。 ○どのテーマで書くか、そのテーマで書くための近現代の短歌と古典の和歌を決定する。	・書きぶりの確認のために、教科書と教員のサンプル【資料7参照】を見させる。 ・学習した和歌や全体で共有した和歌を振り返らせてテーマを決定させる。 ○近現代の短歌については各自で書いたノートのページを開いて机に置き、全員が自由に読めるようにする時間をとる。

		・意欲のある生徒のために、自分で新たな短歌や和歌を取りあげられる場合は、それで書かせても良い。 ○テーマが決まらない生徒には、イメージしやすいように絵や写真がついている図書を勧め、個別に助言する。 ☆今まで読んできた和歌をもとに、テーマを決め、和歌を決めることができる。(観察)
8 9	○決定したテーマで、選んだ和歌から読み取ったことを以下の2つの観点に留意して評論的な文章にまとめる。 ・引用した和歌と創作の文章との内容が合っているか。 ・引用した古典の和歌と近現代の短歌にはどんな関連性があるか。	・タイトルは必ずしも分類したテーマ名でなくても良いことを伝える。自分で作らせても良い。 ・2つの観点について説明し、特に2つ目は文章のまとめとなることを知らせる。 ☆和歌の表現や図書の解説の引用を使って和歌を説明し、自分の考えたことを表現できている。(ワークシート)
10	○観点にそって良い評論的な文章を紹介し合う。 ○これまでの学習の感想をノートに書く。	・事前に全員分のコピーを配布し、良いものを紹介できるようにさせる。 ・前時に用いた2つの観点が書かれていることを前提にして選ぶように伝える。 ○良い点を自分の言葉で言わせていく。もし、1つも上がらない作品があれば4人のグループを組んで、みんなで良さを見つけさせる。 ○それぞれの評論的な文章はどれも読み取りの良さがあり、さまざまな価値観があり、多様な読みがあることを伝える。 ○これまでの学習を振り返り、気づいたこと、学んだことを自由な観点で書かせる。 ☆作品を読み、これまでの学習を通して気づいたことや学んだことを感想としてノートに書けている。(観察・ノート)

〈6時間目の古典の和歌と近現代の短歌の相違点や共通点を発表したときの生徒の発言〉

- ・ワクワクやドキドキを表せるのは、現代の短歌の方が多い。
- ・季節や自然の歌は、どの時代にもあるとわかった。特に色を使って表しているものが多いのは古典の和歌も近現代の短歌も同じだと思う。
- ・恋の歌が多いと感じた。昔の人は、なんでこんなに死にたいと思うくらいの恋ばかりしていたのだろう。昔と今の恋愛感覚の違いが大きすぎると思った。
- ・古典の和歌は一人では抱えきれない気持ちを詠んだものが多い。近現代もそういう短歌もあれば、何気ない様子を詠んでいるものもある。

仮説1にあるテーマを捉えながら多読をする授業（4・5時間目）の詳細

学習内容と活動	形態	・指導上の留意点, ○支援, ☆評価
さまざまな和歌を読み, テーマごとに分類しよう。		
1. 目標をノートに書き, 理解する。	一斉	
2. 三大和歌集のビギナーズ・クラシックから興味を持った和歌を1首選び, 以下の4つをノートに書く。 ①和歌 ②和歌集名 ③ビギナーズ・クラシックスのページ数 ④読み取ったテーマ名 (キーワード)	個人	・個々の意欲を削がないために, どの和歌集を読むかは各自に任せる。難しいと感じる和歌はとばし, 興味のある和歌とその解説をひたすら読ませる。 ○例えば【春】を【春の植物, 春の暖かさ】というように, 大まかなテーマ名を詳しくした言葉で表現できるようにさせる。 ☆ビギナーズ・クラシックスを読み, 興味を持った和歌を見つけることができる。(ノート)
3. ノートに書いた和歌のテーマをグループで発表する。 ノートに書くよう指示した①～③を各自付箋に記入する。グループにA3の白い用紙を1枚用意し, そこに考えたテーマ名を発表させ, 記録し, 付箋を貼っていく。	グループ	・速やかに活動に取りかけられるように, 事前に4～6人のグループを組んでおく。 ○読み取りの確認のために, 各自で読み取ったテーマの根拠が明確かを検討させる。検討した結果, 新たなテーマ名が出た場合はA3の用紙に記入し, そこに付箋を移すことを伝える。 ☆ビギナーズ・クラシックスを読み返し, どんなテーマで書かれているかを考えて分類できている。(活動の様子・グループ活動のA3の用紙)
4. グループで分類したプリントの内容を読み, クラスで共有する。	一斉	○各グループで分類したA3の用紙をクラス全員に見えるように提示し, さまざまなテーマに分類することに気づかせる。(後に評論を書くためのテーマ決めを行うときに活用できるようにさせる。)
5. 古典の和歌と近現代の短歌を読んで感じた違いや共通することを見つける。	個人	・近現代の短歌は事前に並行読書をさせ, 古典の和歌と同じように, 興味を持ったものについて①～③をノートに書くことを指示し, 個別支援をする。 ・見つからない生徒には, ビギナーズ・クラシックスなどの解説書を振り返らせる。 ☆昔と現代の普遍性や違いに気づくことができる。(観察)

6. 研究のまとめ

(1) 研究の成果

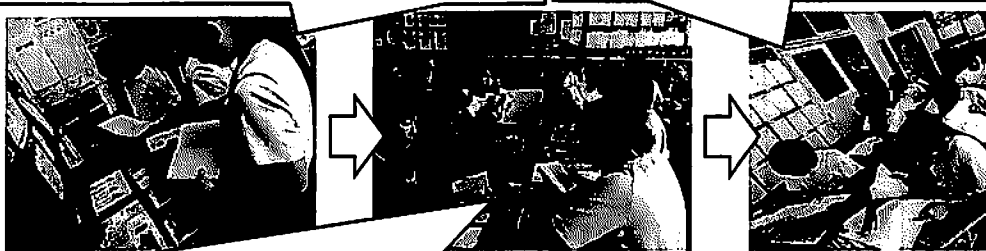
仮説1 和歌の指導においてテーマを捉えながら多読をすれば、和歌の世界に親しむことができ、和歌を読む意欲が高まるだろう。

3次でのグループ活動を通して、和歌をテーマごとに分類しながら読み取ったことで、個人で取り組む時よりも多く多読することができ、時間いっぱいまでビギナーズ・クラシックスを開きながら意見交換を行っていた。さまざまな種類の図書を用意したことで、進んで何冊も本を手にとって見られている様子が見られた反面、読み切ることができずに残念そうにしている生徒もいた。和歌を自分で選んで読み込み、評論にまとめられたことは読む意欲が高まったからだと考え。古典から現代へと時代を限定せずに和歌に触れたことで、生徒の感想【資料10参照】にもあるように読む意欲が高まったと言える。

生徒の姿の変容

〈1時間目の授業中のつぶやき〉
「難しそうだな・・・」

〈10時間目の評論を読む様子〉
50分の授業の中で約30分間、5クラスとも黙々と読み続けていた。



〈5時間目のグループでの分類活動をしているときのあるグループの生徒同士の発言〉

- A「目次のところに春の歌って書いてあるから、テーマは春だと思う。」
B「花の香りとか、鶯って言葉も出てきているから、春の訪れってテーマでもいいかも。」
C「でも花の香りが鶯を誘っていて恋歌めいているって解説にあるから、これ鶯を好きな人に例えているんだよ。だからテーマは恋。」

仮説2 「古典の歌と近現代の歌を選択して評論的な文章にまとめ、読み合う」という言語活動を行うことで、多様な読みができるだろう。

3次でサンプルを示しながら、和歌の価値を読み取ってまとめるということを伝えたことで、和歌の感想にとどまらない深い読み取りができていた。自分で決めた古典の歌と近現代の歌の共通点や相違点を探ることができた。できあがった評論的な文章【資料8参照】を読み合う中で、同じ和歌を選択した文章でも読み取りの違いがあることに気付いた。そうした気付きや生徒の変容【資料5、9参照】から、多様な読みができていたと言える。

生徒のテーマ名の変容 【資料5の一部抜粋】

古典の和歌を読んだときのテーマ名→近現代の短歌を読んだときのテーマ名→評論のタイトル

D「夏」→「梅雨」→「五月の雨の歌」

E「夢」→「人生」→「人生をどう生きようか」

F「恋」→「片思い」→「片思いの甘く切ない歌」

〈10時間目の評論を読み合い、良い評論を紹介し合う授業での生徒の発言〉【資料9参照】

校舎が夕焼けを吸い込んでいくという表現の部分を、「私も吸い込まれるような、なごりおいしい感じ」と書いているところが良い読み取りの言葉だと思った。春の歌を出会いはなく、別れというテーマで読み取ったところが新鮮だった。現代の短歌との比較ができていた。

春の別れの歌	春は、出会いと別れの季節です。その中でも、特に別れの歌は、心から書かれます。その歌は、必ずしも悲しいとは限りません。
山田に 桜咲きまゝ 別れなむ 花のまねに たのしみまゝ 留正 仙崎 古今和歌集	・ 歌の作者は、旧知の仲であり親しい友人との別れをかしげ、この歌をよめました。これいな桜が散ることはさみしく感じられます。その桜が散ることと別れたことと、それらのつながり、それはいかにこのように思ひが感じられます。それは、仲が良く、一緒にいたか、たのしみまゝ。
・ 現代の歌を取り上げましょう。 振り向けば 夕焼け深く 吸い込んで 健能として 融けゆく校舎、 立花 剛	卒業式の頃でしょうか。最後にみる校舎は、きれいな夕焼けのオレンジ色に染まっています。吸い込んでの表現を使うことで、私も吸い込まれるような、なごりおいしい感じをもつけます。 このように、春には出会い、別れがたまたまあります。別れをかしむ人もいれば、決意して前に進む人もいます。別れの歌をよむと、卒業とつながり、今の私達には何の別れがあるのでしょうか。

(2) 今後の課題

本単元を実践する上で、生徒が戸惑ってしまった点は、興味を持った古典の和歌のテーマだけでなく内容まで同じものを近現代の短歌の図書を読みながら探さようになってしまったことである。さらに、教員のサンプルの文末が「～と思います。」となっていたため、生徒が和歌の価値を読み取って表現する際に、主観が多く入ってしまったことが反省点である。

参考資料として用意した新聞歌壇や現代の短歌が書かれた図書には解説がないものもあったため、それが良い負荷となって学習を進められた生徒と途中で並行読書が思うように進まない生徒がでてしまった。

古典の多読から、現代を生きる生徒の視点につなげていく授業をする上で、その世界観を楽しむ親しむためにどう教えていくべきか考えなくてはならない。今回は、類似系の和歌を2首選択させて評論的な文章にまとめたが、さらに発展として対極する和歌で論じる学習もできるのではないかと考える。読むことだけでなく、評論や書くことや考えることの面白さに繋げていくことが、今後の課題である。

資料編

【資料 1】『竹取物語』本文から離れてしまった例

【資料 2】『枕草子』自分だけのものづくり 自分の体験を短く反映できた例

【資料 3】修学旅行の創作俳句 句会でのコメント

【資料 4】本研究 5 時間目 古典の和歌のテーマを分類した活動後のプリント

【資料 5】4～5 時間目に授業で読んだものを記録した生徒のノート

【資料 6】教科書 P.310～314 までの内容

【資料 7】本研究の教師の評論サンプル

【資料 8】本研究の生徒の評論的な文章と参考図書の該当部分

【資料 9】本研究 10 時間目の生徒の発言（10 ページに記載されていないもの）

【資料 10】本研究の 10 時間目に実施した生徒の感想

【資料 11】授業の中で使用した書籍

【資料1】「竹取物語」本文から離れてしまった例

その後、かぐやひめがらもらっらゝすりものんび養生
 せました。そへから20年位生きたと思ふ。②
 かぐやひめはおじいさんのもとへまた③たえゝきて、
 こゝかいをしたと思ひます。③して日の都へとかな。

【資料2】『枕草子』自分だけのものづくり 自分の体験を短く反映できた例

• 11 6 8 15 2 2 11 13

本二のかわいらしいところ。小たにころのくり、としたとげけたよ、な
れい目。ゴロゴロしなから寝持す良士とうにきに顔すすりよこくる
ところ。呼んでも無視するし、ものには利が何かに集中するし、かこしに
来るところ。ねてると上に乗、てきて我が物顔でゴロゴロはじめるところ。

【資料3】修学旅行の創作俳句 句会でのコメント

水の果という言葉が水がすい、いとおどけ
は流れているというところが今かきさつた。
風景が想像しやすかつたです。

「しづく水の矢心打つ」の
ところで本当に心打たれた
みたいだった。

意味が書いてあるとてもいい句だと思
いました。すばらしい水キャブラリ
だと思いました。

滝のしぶきを矢にたとえてい
る所がすごいと思つたし、感動し
たことがよくわかるやうなた
ついたまうようになつてくる。左
想像してしまふ。

滝のもと　しづく水の矢　心打つ

バスの中で新緑を眺めて
心がゆられたりとするとこ
ろがよくわかるですむいと思ひました。

ながめ揺られるところへ、バスの中
からいろは坂の景色を見て、いろは
がわかる。

いろは坂をながめている。
イメーヅがうかんできました

その時の気持を表現している。

新緑をながめ揺られる　いろは坂

[illegible]

Aの感じたことの記述内容の変容

古典の和歌を読み始めた
解説を読んで、おおまかに
感じたことを書いた。

グループでの分類を終えた後
具体的なイメージを書き始める。

現代の短歌を読んだ後

具体的にどんな表現から
何を読み取ったのかを審
いた。

つ方角の秋葉に、
夏と秋と好きか不愛の差は餘ほ
がたへ、涼しき風を吹くうむ

へ花味、
夏と秋とが有れど、さう望の通い勝は、
片腕で殊しい秋風が吹いていかれた力うが。

ハネトス✓夏・望・風

へ鹿じだこと、

この歌は、暑い夏が終わり、ようやく涼
しい秋バヤ、つく方という季節に来るた
歌です。

夏は林は行草が不埒の道は路は
かたへ入れし風を吹くうら
夏が終わり、秋がやってくるときに
生えたる風が吹いては、かたへ入れ
し風の吹く林は片断す。そ
吹いては、かたへ入れし風の吹く

① 風が吹く
② 水
③ 江戸夏は、風を食ふといふ。江戸の風は、色に水が輝く
④ 鎌倉
⑤ 向恨みやりの、夏が細かり、秋がす。てきと球とい
風が吹いてくるといふ球、てきと球といふの、
⑥ 日は、夏夏と、水を見つと、赤い風が吹いて
その風が吹く、水が輝く、球といふといふ
鎌倉が、風があるといふ。

B.の感じたことの記述内容の変容

古典の和歌を読み始めた

ビギナーズ・クラシックスに書かれている解説を用いて、表現されている言葉を取りあげながら書いた。

現代の短歌を読んだ後

表現に着目し、誰の目線でどんな姿で何を考えているのかを自分で具体的に想像して書いた。

下流に思ひ消えぬ涙を胸にまき雲の果てが非にぞ
りて悲音にそよむ現代詩歌
（つとむ）
いのちのひそかに沁みわたる私は死んでしまふのだらうその左腕を握く
涙もろく跡形もなく手の中になきまじまじうそんな夜にゆく未だ悲し
みよつとつと
恋の片想ひ失夜（つとむ）
おぼろげな月照映を眺み数回眺めになぞきこえさうなうなだけありん
かたに穿つて思ひこす道で寂木木思ひのりかじりぬを丹涙えしと
月を望む望に絶望となる時をなかなかなも衣現である。もろく
は夜衣物留め二つの歌を題まて消えたる自分の形をなす
はつた衣物の形をなす歌に消えてしまふあの夕の自分の
を知らずにはなすといつておぼろげの何となく消えてしまふ歌である。

[illegible]

古今和歌集
P47

夏の夜はまだ宵ながら明けぬと雲のいつこに月やさくらを
 金へ味

夏の夜はまた宵だと思つていたのに明けました。たがいたい雲のまゝに月が宿つてゐたやうなうか。

今一夏

片を見ながら煮ていふ太陽がでてきて月かくもにかくはる様子を巻いていゝのがおもしろいなと思つた。

④現代万葉集

②
P41

今一之梅雨

③ 梅雨の少なくて今日また朝より甚重なるようなり
④ 未だ降らず

⑤ 最近モ、梅雨の面が身入り、霞、いてなく、朝から真夏のような日が多くなつてゐるからと、私も暑感でゐるなと思ひました。

現代の短歌と古典の和歌から読み取ったことを評論にまとめよう
次の観念に氣を付けて。

① 古典の和歌と現代の短歌に因りて

②引用と地
のその内容の真正性があつた

新古今和歌集 四

うぢにめりあやめぞかをる郭公鳴くや五月の雨の夕暮ゆふぐふ

五月の雨

五月の雨は
じりじりして
人もな人と
なく優^{やさ}し
かな気分に
させてまう

うちしめりあやめをかきたる郭公鳴くや五月の雨の夕暮水

梅原良經新古今和歌集

心が動かされた和歌を道選
トセノトに書コフ

萬葉集

生ける者 道にも死ぬる 屯のには水は

二の世にある間は 楽しくをあらた

竟味

生きている者は紅屋。死んでしまふのだから、二の世に生きている間は楽しくいたいものだ。

今一也

夢
人生

愈いたこと

生主亦度常とはかきり生主人

死がは、てはじめて生がはる。一きり、生きてゐる者はいつかたなうが
死んでしまひます。なからにて、この世に元氣に生きてゐるうちは、衆
生にくらべていい、という思ひがよく伝へてきます。

自分のためだけに現代の軽歌を選ぼう

① ラインマーカーズ

②
50
7°
1
32

③ 真板中の中古車売り場で思い切り振った。疲れた三ツ矢さん。

④穂村弘

⑤ ⑥ 昔の短歌は、自分にはどこか難しいイメージで、あまりよく分

ちです。中でもこの歌はまたのイタズラですが、短歌でそのワウワヤ

の
で
よ
か
っ
た
で
す

いかに動いた歌を一首選んでノートに書こう。

新古今和歌集 P139

思ひあまりに空をながめれば霞をわけて春雨を降す

金葉

恋しい気持ちに耐えかねて、あなたはいまお宮の奥でいじり見つけています。立ち上った腰を分けようにして、細かな春雨が降っています。

テーマ 恋

恋したいこと

恋したいと思ってもあえない片思いの切なさを感じた。

霞や春雨などいじりもやもやしたもどかしさを感じた。

好きな人(の姿)の片角を見つめるといふ恋の甘さ少し感じた。

片思いのつらさと甘さが混ざるといふ恋だ。

物語の主人公 P139

甘きオオノエノ花を恋しむるは春の宮のこころ過しきなり

自分の決めたテーマに合った現代の短歌を選ぼう。

テーマ 片思い

① 甘きお念日

② P. 39

③ 恋する人、君に会えない一日も春の宮のこころ過しきなり

④ 春の宮

⑤ 会いたくても恋人はなにかから会えない、片想いの切なさを感じた。

好きな人(の姿)の片角を見つめるといふ恋の甘さ少し感じた。

「春の宮のこころ」で恋の甘さをわかってきたので、恋の切なさを感じた。

恋の切なさ

現代の短歌と古典の和歌から話をして、その意見を評論にまとめよう。

恋しい気持ちに耐えかねて、あなたはいまお宮の奥でいじり見つけています。

片思いをしていゝ人は、好きな人(の姿)の片角を見つめるといふ恋の甘さ少し感じた。

思ひあまりに空をながめれば霞をわけて春雨を降す

新古今和歌集 P139

恋しい気持ちに耐えかねて、あなたはいまお宮の奥でいじり見つけています。

作者の気持ちを表すように立ち上った腰を分けようとして、細かな春雨が降っていました。会いたいと思っても会えない、好きな人が今いそ

おろう片角をいじり、見つめるといふ恋の甘さ少し感じた。

現代の歌もとりあげよう。

恋する人、君に会えない一日も春の宮のこころ過しきなり

春の宮

春の宮とは、天皇の妹が伊勢神宮の巫女になられたためにいた場所のこと。巫女に選ばれた人は男性と関わり、それが禁じられていました。

春の宮と恋のこころ、このように思ひをいせながら静かに恋のこころをいひます。

●短歌によまれている作者の喜びや悲しみにふれる。

古典の歌、現代の歌

佐佐木幸綱

みなさんは新聞の歌壇を眺むことがありますが、日本には、週に一回、一面全部を使って、投稿されてきた短歌・俳句を掲載する新聞があります。これは世界的に例がありません。外国の人に、日本では誰でもが作れ、誰でも新聞紙上に自分の作が載る可能性があることを伝えると、彼らは驚き、羨ましくも思っています。

短歌には千三百余年の長い歴史があり、多様な作者・作品があります。私たち日本人が短歌をどう楽しんできたか、そして、現在、どう楽しんでいるかを見てみましょう。

新聞歌壇がそうであるように、誰もが作れる時として短歌が今日も生きている背景には、古くからの歴史があるのです。

恋愛する男女が、お互いの心のコミュニケーションとして短歌を用いるケースが、すでに万葉集に見られます。

我が里に大宮降り大原の古りにし里に降らま
くは後
万葉集

我が國のおかみに首ひて降らしめし首のくだけ
しそに散りけむ
万葉集

朝起きたら雪が積もっていた。驚きの気持ちをも、愛する人に伝えた。現代だったらメールするところを、万葉集の時代の人々は、短歌で気持ちを伝えました。

二人の住まいの距離は近い。歩いて行ける距離です。すぐ近くの「我が里」のほうが早く雪が降ったと自慢し、それに対して、雪神に降らせたい「我が國」の雪の破片が、そちらに降ったのと同じように返す。心が通じ

合っている者どうしならはの元珠のやりとりです。

現代の短歌も取り上げましょう。現代は、恋愛をする者どうしが、短歌を贈ったり贈られたりする習慣はありませんが、恋の思いを表現した短歌はたくさん作られ、送られています。

短歌集「元珠」の巻頭に「元珠」は一日我には一生
生
元珠

遊園地のシンガポ、短歌集に二人で集っている場面を思い浮かべてください。一緒に遊んで帰っている二人の心の中は同じではない。対句仕立てになっている下句が、対照的な二人の心を描き出しています。失恋の歌です。せつないですね。

「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかき
微かな
微かな

登場人物は二人。こちらの恋愛はうまくいっています。二人の間は情熱で結ばれています。だから、同じ言葉をお互いに話しかけて、ほのぼのとした心で通じ合っています。お互いに「寒いね」と言い合っている心は温まる。人と人との関係の不思議さ、愛することの不思議さが感じられます。

短歌史は季節の歌を大切にしてきました。その証拠に、万葉集二十巻、古今和歌集二十巻、新古今和歌集二十巻、みな最初に四季の歌が載っています。日本独特のデリケートな季節感、こういう歴史の積み重ねに拠っているのです。

季節の歌の中でも特に興味深いのは、季節の変わりめに対する興味をたった歌です。こんなところに興味をもった歌にしたのは、たぶん日本人だけでしょう。

夏と秋と行きかふ空のかよひちはかたへすし
き風や吹くらむ
凡河内、秋風
古今和歌集

去ってゆく夏とやってくる秋が、空の通過でそれ違うという奇抜な想像です。夏と秋が、それぞれの任務を帯びた人間のように交代するという、ユーモラスなアイデアはすばらしいと思います。

この歌に、「古今和歌集」では「六月のつごもりの日よめる」という副題があります。旧暦では四、五、六月が夏。六月末日は、旧暦の上で夏の最後の日です。また夏と暮のだけだと秋がすぐに待機している。秋が待機する間だけ、通過に涼しい風が吹くというのです。次は、その翌日、立秋の日の歌です。

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にや
おどろかれぬ
凡河内、秋風
古今和歌集

「夏と秋と……」の歌の一日後。目で見える世界は、昨日と全く同じ。が、風の音や風に感じる風の感触が、秋なのだと思わせる、というのが「秋のな気分」といったらいいでしょうか。実にデリケートな季節感を表現しています。

最後に、社会的な事件に取材した短歌を見ておきましょう。短歌は、政治や経済、地震などの災害まで、あらゆる社会的なできごとをたててきました。ここでは、阪神の歌をあげます。

死にいくつうち起こし見て互により立つ
入りてゆきたり
竹山、阪神
竹山

大きな先生ならむそのそばに小さきあまたの
骨あつまり
正田、阪神
正田

阪神の歌の作者は、長崎の豊心地から一四〇メートルの地点で被災しました。たまたま病院のビル内にいたために奇跡的に助かりました。うたわれているのは、被災後まだ一日か二日しかたっていない被災地、家族の安否

を気づかっ、英天下の互に中をさまよう人々です。作者自身も焼け野原を歩き回り、全身にやけどを負った兄の死をみとるといふ、つらい体験をしています。

あとの歌は、広島平和記念公園の「秋風」と子どもの「神」の台座に刻まれているので、知っている人も多いでしょう。一瞬で骨だけになってしまった現地に取材しています。骨は先生と小学生のものでしょうか。この作者は広島で被災しています。

「万葉集」以来、長い歴史をもつ短歌は、このようにして、今日も日本人の喜びや悲しみを表現し、生活の多様な場面を映し出しています。今後もさまざまな工夫を加えられて、発展していくだろうと期待されます。

安部公房、短歌

一九六六、戦後の短歌に代表。

佐佐木幸綱、短歌

一九六六、戦後の短歌に代表。

佐佐木幸綱、短歌

一九六六、戦後の短歌に代表。

佐佐木幸綱、短歌

一九六六、戦後の短歌に代表。

佐佐木幸綱、短歌

一九六六、戦後の短歌に代表。

佐佐木幸綱、短歌

一九六六、戦後の短歌に代表。

佐佐木幸綱、短歌

一九六六、戦後の短歌に代表。

佐佐木幸綱、短歌

一九六六、戦後の短歌に代表。

佐佐木幸綱、短歌

一九六六、戦後の短歌に代表。

佐佐木幸綱、短歌

一九六六、戦後の短歌に代表。

佐佐木幸綱、短歌

一九六六、戦後の短歌に代表。

佐佐木幸綱、短歌

一九六六、戦後の短歌に代表。

佐佐木幸綱、短歌

一九六六、戦後の短歌に代表。

佐佐木幸綱、短歌

一九六六、戦後の短歌に代表。

佐佐木幸綱、短歌

一九六六、戦後の短歌に代表。

『家族との別れの歌』

家族への愛情が表れる歌の中でも、死が分かたず別れの歌は心に突き刺さるものがあります。

防人に行くはたが背を問ふ人を見るがとそしそ物思いもせず

防人の妻 『万葉集』

防人とは、上代から平安初期にかけて、他国から日本を守護した兵士のことです。一度その任務に就いたら死も覚悟しなくてはなりません。その任務に行く夫の姿を見た周りの女たちが私には関係ないわと言うように、次に防人に行くあの人は誰のこ主人かしら？」と話している声が聞こえてくる。不安でたまらない妻の視線で詠まれたこの和歌には、そんな言葉と言う女たちまわりのやましく思いつつ、ただ夫の後ろ姿を見つめることしかできない切実な思いが感じられます。

父母が頭を撫下すあれて言ひし言葉ぞせむれかねつる

大船船麻呂 『万葉集』

こちらは防人に行く子の立場で詠まれた歌です。もう小さな子どもではない息子の頭を撫下るのは、単なる愛情表現だけでなく、無事を祈るまじないでもありました。「幸くあれて（元気で）行ってこいよ」というその一言に親としてのすべての愛情と願いを込めたのでしょう。だからこそ、子は別れ際のその言葉が頭から離れずにいるに違いないと思います。

現代の歌を取りあげましょう。

あまたる気持がこんなにかわりのに言ひ残すことの何ぞやうき

河野裕子

死の直前に家族にむけて作られた一首です。残される側の気持ちに痛みがほどわり、伝えたいとはたくさんあるのに、どう言葉で表せばいいのかかわからず、難しいと実感しているようです。

死を覚悟した家族との別れに、それやれの立場からの思いが見えてきます。どの歌も目の前にいる相手への言葉数はとても少ないのです。その分、悲しみやつらさ、そして愛うき痛いは心に伝わってくるのだと思います。



なにとなく君に待たるるここちして、
出でし花野の夕月夜かな

与謝野晶子

『学智俳句・短歌歳時記』10

雑歌百選

藤森徳秋ほか監修

二〇一二年七月二〇日 国土社

なんとなく、あなたに待たれているような、
そんな気持ちで、花の咲く秋の野に出て
みると、夕月が出ている。
夢見るような乙女心が、滑らかに歌われて
いる。
「花野」「夕月夜」などという、美的な感覚を
誘う言葉を晶子は、豊富に使う才能があった。
青春の世界と、感覚の世界を高らかに歌い
上げた「みだれ髪」は、明治の抑圧された歌
の世界に新風を巻き起こす。

◆星の林に月の舟——天の海に雲の波立ち

天の海に 雲の波立ち 月の舟 星の林に 漕ぎ隠る見ゆ

(二〇六八 人麻呂歌集)

果てしなく広がる天の海に、雲の白波が立ち、その海を月の舟が漕ぎ渡つて、星の林に隠れて行くのが見える。

＊とても千三百年も前の作とは思えないほど、斬新な感じがする。天を海、雲を波、星を林、そして夜空を渡る月を舟に見立てている。月の舟を漕ぐのは誰かというところには「月人壮士（11月の男）」である。

天の海に 月の舟浮け 桂樹 懸けて漕ぐ見ゆ 月人壮士 (二二三三 作者未詳歌)
(天の海に月の舟を浮かべて、桂の木のかげをかけて、月の男が漕いで行くのが見える)

月人壮士とは何者なのだろうか。宇宙人だろうか。

夕星も 通ふ天道を いつまでか 仰ぎて待たむ 月人壮士

(二〇一〇 人麻呂歌集)

秋風の 漕ぎ夕に 天の川 舟漕ぎ渡る 月人壮士

(二〇四三 作者未詳歌)

大船に 真楫しじ貫き 海原を 漕ぎ出て渡る 月人壮士

(三六一一 柿本人麻呂)

これらは七夕の歌であり、月人壮士を牽牛とする説もある。また、月が空を渡り終えると、牽牛と織女の逢瀬が始まるともいわれた。

ヒキナズ、クラシックス 万葉集

恋り歌

恋は片思い、両思い、失恋 などさまざまですが、

両思いの中でもバに響くものや共感できることもあります。

天の海に 雲の波立ち 月の舟 星の林に 潜ぎ隠る見ゆ

人麻呂歌集 『万葉集』

月の舟を潜ぐのは、月の男(彦星)です。果てしなく広がる天

の海に、雲の白波が立ち、その海を月の舟が潜ぎ、渡り、星の

林に隠れて行くのが見える様子が詠れます。また、月の男

(彦星)が織女に会いに行くのが伝わります。

なにとなく君に待ろろここちして、出でし花野の夕月夜かな

与謝野晶子

「なにとなく君に待ろろここちして」は、好きな人が待っていない

とわが、ているだけけれど、待っているような気がして

いつの間にか歩いと花々が咲き乱れる野原に ついた

という、好きな人のことが頭の中から離れられない、好きな
思いを抱く女性の行動に共感しないでしょうか。

好きな人を抱くほど好きな気持ちが大きくなるのは、今も昔も
同じです。そして、恋をする人々の感情も人それぞれ違うこと
も、伝わります。

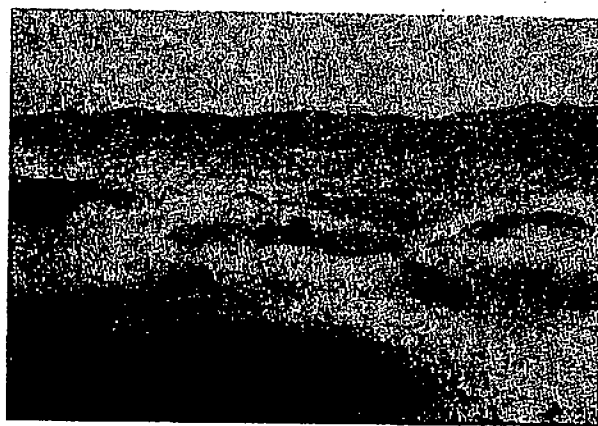
和歌の内容から離れることなく、しっかりと読み取った上で、昔
と現代の価値観を比較し、共通点をまとめることができるよう
になった。

白雪踏み分けて入りにし人のおとづれもせぬ

(三三七 壬生忠岑)

を踏み分けて、山に入っていた人が、手紙もよこさない

野山は現在は桜の名所として有名だが、当時は雪深いイメージの
の対象で、神秘さと厳しさを合わせた土地であった。そのよ
わざわさ分け入っていく、知り合いの修行者への思いを詠んだ歌
「づれもせぬ」というのは、修行者の自分に対するつれなさを嘆い
、世を遁れて仏道修行に専念する相手への尊敬や吉野山の厳しい
いる表現と理解するのがよい。



吉野山〈雲海に浮かぶ蔵王堂〉

それでも相手への思いの強さから、
後世には遠距離恋愛や別れた恋人への
思い遣りを詠んだものと読み替えられ
るようになり、例えば「義経記」では、
兄の源頼朝に追われる義経を思い遣
る恋人の静か、自らの思いを表現する
歌として使用されている。
吉野山に入っていく相手の姿は、
様々なイメージを膨らます浪漫的な要
素を内包していたのであろう。

短歌の胸キュン

栗木京子選



三月のテーマ「鍵」

三月の投稿歌より(二月十日締め切り分)

大賞

し家に入れずオリオン座見上げて深い溜息ひとつ

としてしまった作者。そういうときに限って家は留守。家族もなかなか帰ってきません。溜息をつ
か況がよくわかります。この歌のすぐれているのは「オリオン座見上げて」と表現したところで
、暮に南中するオリオン座。首星はベテルギウスです。遠い星へと視点をばたかせたことで季節
歌が立体的になりました。

京都府 大谷高校 大倉克之

「NHK短歌5月号」↑

2017年4月20日発行より

『ヒギナズ・クラシックス 古今和歌集』↑

□ 冬歌、相手を想う歌 □

大切な人を想う歌の中でも、寒い中相手を想い、待ち続ける姿に心を打たれます。

み吉野の山の白雪踏み分けて入りにし人のおとづれもせぬ

壬生忠岑 古今和歌集

当時の吉野山は雪深く、神秘さを含ませ持っていた土地であり、その雪深い吉野山へわざわざ分け入っていく修行者（大切な人）への尊敬、吉野山の厳しさを感じられます。また、相手への思いの強さや感じられることから、吉野山に入っていく相手の姿は決意を感じられるものであると思います。現代では、遠く離れた恋人を思い歌として考えられています。

現代の歌も取り上げましょ。

鍵失くし家に入らずオリオン座見上げて深い溜息を吐く

大倉克久

ある夫婦の話でしょう。鍵を失くし、家に入らず、一人で、寒い冬の外で、大切な人の帰りを待っている様子が浮かびます。今、相手がどこにいるか、わからない。心配。大切な人、長い時間、期待と不安の中、待ちわびている人の様子が伝わります。

いつの時代も大切な人を想う気持ちの強さは変わりません。寒くても、どれだけ待たされても、期待を胸に待ち続けるのだと思います。

『五月の雨の歌』

五月の雨はじめじめして、人をなんとなく
優鬱な気分になせます。

うさしめりあやめをかえる郭公鳴くや五月の雨の夕暮れ

藤原良経『新古今和歌集』

第五句の「五月の雨」は文字通り五月雨のこと。

現在の梅雨にあたります。と降る雨は、何
となく優鬱な気分になれます。ほの暗い夕闇の中か
は、郭公の鳴き声が聞こえてきます。それを聞きな
がら一人で物思いにふけている所を想像で
きます。

一方、現代の歌は、

梅雨らしい日の少なくて今日もまた

朝より真夏のような日となる。

赤坂洋子

梅雨らしい日が少なく、じめじめとした感じ
もなくて、朝から真夏のようになり、暑い感じが
わかります。

五月の雨は、昔は人を優鬱にならせていた
なことに違い、物思いにふけていました。
ですが現代では、五月から雨が降らない日
が続いたりして、梅雨っぽくありません。今と昔では、
季節感がどんどん変化している人だなと思いました。

「人生をどう生きようか」

〆

みなさんは、人生をどのように過ごしていますか。そして、これからどう過ごしたいですか。

生ける者遂にも死ぬるものなれば三世にまたる間は楽しくをよみな

大伴旅人 万葉集

生きている者は、いつか必ず死んでしまうのだから生きている間は、楽しくいたいものだ。

この歌から伝わる言葉は、まさに「人生」です。

人は死んだらどうなってしまうのか、また人間に生まれ変われるとはかぎらない。だからこそ今生きている瞬間を楽しく過ごしたいという作者の強い思が伝わってきます。

さて、今紹介したのは古人の和歌ですが、次は現代の短歌を見てみましょう。

真夜中の古車売り場で思い切り振って疲れた三ッ矢サイダー

穂村弘

さっきの歌とくらべるとだいぶうつな感じがしたと思います。それこそが現代の短歌の醍醐味なのです。あまり興味の無い人はいきなり短歌と言われても、難しく、高齢者などが楽しむものかと思うでしょう。自分もそうでした。ですが現代の短歌は、なるべく柔らかくし、幅広い年代にも伝わりやすくしているのだと思います。中でも右の歌は、見るとタイトルから外れているようにも思えますが、イタズラで「人生を楽しむ」と言っている上は、和歌と同じなのだと思います。

この評論では「人生」というタイトルで話してきましたが、短歌はたくさんのジャンルがあります。ですが、古くから伝わる和歌にも、現代の風潮を捉える短歌にも何か一つのテーマを自分の言葉で表現するということには変わりなく受け継がれているのを感じました。

『片思いの甘く切ない歌』

片思いをしている人は、好きな人のことがいつも気になってしまいます。

思ひあまりそなたの空をながむれば霞をわけて春雨ぞ降る

藤原俊成 新古今和歌集

恋しい気持ちに耐えかねて、好きな人のいる方角をじっと見つめていると、作者の気持ちを表すように、たちこめた霞を分けるようにして細かな春雨が降っていました。会いたいと思っていてもなかなか会えないので、好きな人が今なにをしているのか考えながら好きな人のいる方角を霞や春雨のようなものもやめた気持ちでかかえながら見ている。片思いの甘さや切なさを両方が伝えます。

現代の歌もとらあげましょう。

ベシニタイン君に会えない一日を斎の宮のごとく過ごせし

俵 五智

斎の宮とは、天皇の娘が伊勢神宮の巫女になつたために場所のことで、巫女に選ばれた人は男性と関することを禁じられていました。その斎の宮で過ごしているかのようにベシニタインの一日を今日は会えない好きな人のことを思いながら静かに過ごしている様子が伝わります。

好きな人になかなか会えない切なさは今も昔も同じだということが伝わります。会えないから、一日中好きな人のことをももやとした気持ちをかかえながら、考えてしまうのだと伝わります。

「冬の心の豊かさを讀んだ歌」

歌人の気持ちを書いてあり、そこに自分の感じたことも読み取りとしてまとめている。
気候の寒さから、人の温かさへと繋がるのがよくわかる読み取りをしている。

冬は寒さを感じる季節ですが、人間の心も冷え切っているとは限りません。隣りにいてくれる人や、憧れがあることで心に温かさを感じることができます。

冬ながら空より花の散りくるは雲のあはたは春にやあるりむ

清原深養父『古今和歌集』

冬の空から降ってくる雪を春の白い花と見立てて歌っています。見えない空の向こう側の景色を春と想像して、これから来るであろう季節に期待や憧れを膨らませていきます。冬の歌なのに心の豊かさや、春の暖かさを感じられます。

現代の歌も取りあげましょう。

「寒い」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかで

俵 万智

人間同士のつながりの大切さや身近にいる人の温かさを歌っています。「寒いね」という何気ない会話に「寒いね」と答えてくれる人のいる幸せや心の温かさが伝わる作品となっています。

この二つの作品を見ると、季節は冬であるにも関わらず、憧れや人が心を豊かにしてくれることが読みとれます。時代は違っても、冬という寒い時期だからこそ感じる気持ちというものもあるのかもしれません。これからの時代も心の豊かさを感じられる作品が出てくることか期待できます。

【資料2】の生徒の評論的な文章

『女性の一途な想いの歌』

今昔も、女性から男性に对する一途な想いは、長く詠まれ、そして愛を続けています。

君を、おきて、おだし心を我がもたば、木の松山波も越えなむ

「古（く）和歌集」 詠み人知らず

「木の松山とは、決して波が越えなない山であり、おきておだしの心を詠み人によく使われていました。おきておだしとはこの歌でも詠まれているように、常に浮気をながめ、引き合ひはされていたそうです。

このことから、私は決して浮気なんではない、という思いを少し口説きかして相手に伝える情景と、あなたしかいないよ、という思いが見えます。

現代へ歌では、

はい、あなたに庄ま本変わ、たり君になれたくらい君が好きです

岡崎裕美子

という歌があります。「あのことと思うあまり、君になつてしまいたいほどに想っている様子が伺えます。文頭には「い」と書かれていて、このことから、「君」への想いに少しも疑いを持たず、堂々としている声色も想像できます。

四首も引用しながら、古典の和歌と近現代の短歌と比較できている。それでいて、テーマにそっていることがまとめの部分からわかる。

しかし、こんな一途な想いは、必ずしも実るとは限りません。

五の緒よ絶えなば絶えかなからへば忍ぶることの弱りもする、

新古今和歌集 式子内親王

この歌では、秋めていなければならぬ恋を、稿しきれなくな、た瞬間。ことを、詠んでいます。秋め続けた叶わない恋に一途な志心も、もう揺れしきれない。叶わないなら、いゝこのまま私の命は絶えてしまふ、という悲しい思いが感じ取れます。

現代の歌も取り上げます。

好また、た世界をみんな連れてゆくあなたのカマリ燃えるみずうみ

永直子

「あなたがたのとなりでいつまでもこの世界を見ていたか、たのしみという思いが詠まれています。燃えるみずうみは、あなたへの思いを表しているの、でしょうか。燃えるほろろみずうみが燃えるほど想っているのに、その熱は「あなたのカマリ」には届かず、かまちはそのままどこかへ行ってしまう。

このように、通い婚やお見合いや親の決めた相手と結婚するものがあたりまえだった時代から、自由に恋愛ができるようになった今、女性から男性に対する一途な想いは、いつでも変わらぬものであるから、時代をこえて愛され合っているのだと思います。

自分の独自の読み取りをしたことがわかる。他の人が考えないところに気づいている。何でこの古典の和歌と近現代の短歌が関連しているのかわかる説明をしている。

『両想いにならう感じるであらう歌』

愛し合っているも、夫婦でいても、相手の全つを知り、全つを信じるということは難しいようです。

君をおきてあだし心を我が持たば末の松山波も越えなむ

詠み人知らず「古今和歌集」

この歌の「君」は男性を指し、女性が男性に向けた誓いの歌だろうといわれています。一見すると、自分の潔白を証明したくて相手にすぎる女性が想像できます。しかし下の句が反語となり、自分を疑う相手に向けた皮肉だということも読み取れます。両想いでありながら、お互いを信じ切ることができない複雑な気持ちを感じます。

あなたは勝つものとおもつてゐましたかと老いたる妻の

さびしげにいふ 土岐善磨 「三十一文字のパレット」

太平洋戦争をたたえていた作者に対し、妻がつばやいた一言です。面と向かって言わなかった分、より作者の心に

刺さったのでしょう。もう老いているほど長く連れ添っ

ているのに妻の気持ちに気がつかなかつた作者の反省のような思いを感じます。

色ならば寒色なりと二十五年つれそふ妻がわれをいいたり

柴生田 総 「三十一文字のパレット」

寒色にはあまりあたたかみやわらかいイメージはありません。作者の妻はもしかすると純粋に似合っていると言ったのかもしれませんが、そうではない気配を感じ取ったのでしょう。二十五年という具体的な数が、一緒にいる時間の長さや相手への理解が比例しないことを印象づけています。

相手の事が分からないことは、さびしさや悲しさを感じさせます。しかし予想外のことを言われたり、批判されたりして食い違ふことによって、当たり前のように一緒にいることがどれだけ大切なことかわかるのではないのでしょうか。

和歌を学ぶことが楽しみ、自分も書き、他の人の和歌を評し、詩人としての成長を体験することができた。和歌の深さ、奥行き、そして、和歌の歴史、文化、そして、和歌の未来について、多くのことを学べた。和歌の魅力を、自分自身で体験することができた。

日本文化から伝わる和歌について、今まで、和歌の魅力を、自分自身で体験することができた。和歌の魅力を、自分自身で体験することができた。和歌の魅力を、自分自身で体験することができた。和歌の魅力を、自分自身で体験することができた。

和歌の魅力を、自分自身で体験することができた。和歌の魅力を、自分自身で体験することができた。和歌の魅力を、自分自身で体験することができた。和歌の魅力を、自分自身で体験することができた。

自分の中で一番おもしろいのは、「評論も書く」授業が、和歌から読み取り、そのことを書くことで、和歌の魅力を、自分自身で体験することができた。和歌の魅力を、自分自身で体験することができた。和歌の魅力を、自分自身で体験することができた。

古典の歌も、現代の歌も、読むことが、和歌の魅力を、自分自身で体験することができた。和歌の魅力を、自分自身で体験することができた。和歌の魅力を、自分自身で体験することができた。和歌の魅力を、自分自身で体験することができた。

和歌の魅力を、自分自身で体験することができた。和歌の魅力を、自分自身で体験することができた。和歌の魅力を、自分自身で体験することができた。和歌の魅力を、自分自身で体験することができた。

短歌等の字数が決まっているものは、そのぶん、
そこにもあって大変だった。同じ系統の短歌を採るのも大
変だった。評論自体は書くの楽しかった。色々
々な人の文章読めたのはいい。死後になった。

共和歌の學理を通して受けるにせむなり
 昔は今に於て人々感ぜざるなり
 考へはあまたなれておぼしき所
 なりしがあまたなりき。

[illegible]

學費を過ぐし、現行のものより著者の取のたが深がが有ると思ひます。
 何回も讀むと、人なれぬものゝやうな事があり、おもしろいと思つた。
 おもしろい和歌もあれば、笑ひて下る和歌ばかりあり、一面腹巻を穿たせようだ、
 下しやせやうと思つた。

[illegible]

二の将盤を通して、少なからず文章から作意の心情を読みとる力があつたと思ふ。特に現代の方は解読とばかりいふものが多いから、讀み取ることが出来た。

また、四のまを讀んで、色々な角度から物事を考
へて、五のまを學んだ。たしかに、五の思ふところは、人
々から認められた。

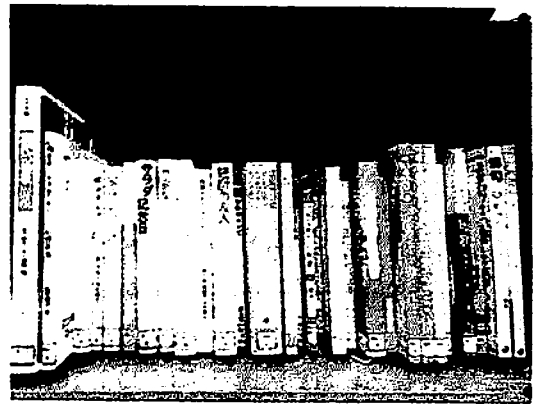
夫をかくのは苦手だ。だが、二位になれるから
自信がたつた。

色々な短歌を読んで、前よりもっと短歌が好きになったし、興味を持ちました。昔の短歌には、「恋」や「季節」をテーマにした少し固いイメージのものが多いと思いました。私は「現代の短歌」にもそういった作品が多いと思いました。が、しりとりを使った、ただくだけていて面白いものも多くておどろきました。今の時代から考え、自由な考えを持った色々な作品もよみこむことができて楽しかったです。

【資料 1 1】授業の中で使用した書籍

- ・『現代万葉集』 日本歌人クラブ編 NHK出版
- ・『万葉集 ビギナーズ・クラシックス』角川ソフィア文庫
- ・『古今和歌集 ビギナーズ・クラシックス』角川ソフィア文庫
- ・『新古今和歌集 ビギナーズ・クラシックス』角川ソフィア文庫
- ・『三十一文字のパレット』俵万智 中央公論社
- ・『目で見える日本の詩歌 14 ジュニア版』しのひろむ TBSブリタニカ
- ・『物語のはじまり』松村由利子 中央公論新社
- ・『乱反射』小島なお 角川書店
- ・『ラインマーカーズ』穂村弘 小学館
- ・『親子で楽しむ短歌教室』米川千嘉子 三省堂
- ・『こども短歌塾』松平盟子 明治書院
- ・『サキサキ』穂村弘 岩崎書店
- ・『そこにいますか』穂村弘 岩崎書店
- ・『べったんべったん白鳥がくる』穂村弘 岩崎書店
- ・『オレがマリオ』俵万智 文芸春秋
- ・『風が笑えば』俵万智 中央公論新社
- ・『春の名歌百選』藤森徳秋ほか監修 国土社
- ・『夏の名歌百選』藤森徳秋ほか監修 国土社
- ・『秋の名歌百選』藤森徳秋ほか監修 国土社
- ・『冬の名歌百選』藤森徳秋ほか監修 国土社
- ・『雑歌百選』藤森徳秋ほか監修 国土社
- ・『はじめてであう 短歌の本 冬と春の歌』桜井信夫 あすなろ書房
- ・『はじめてであう 短歌の本 夏と秋の歌』桜井信夫 あすなろ書房
- ・『はじめてであう 短歌の本 心の歌Ⅱ』桜井信夫 あすなろ書房
- ・『家族の歌』河野裕子 産経新聞出版
- ・『くびすじの欠片』野口あや子 短歌研究社
- ・『ここからはじめる短歌』梅内 美華子 ナツメ社
- ・『最後から二番目のキス』林あまり 河出書房新社
- ・『サラダ記念日』俵万智 河出書房新社
- ・『震災歌集』長谷川 中央公論新社
- ・『世界中が夕焼け』穂村弘 新潮社
- ・『短歌があるじゃないか』穂村弘 角川書店
- ・『短歌の友人』穂村弘 河出書房新社
- ・『短歌のレシピ』俵万智 新潮社
- ・『プーさんの鼻』俵万智 文芸春秋
- ・『はじめての短歌』穂村弘 成美堂出版
- ・『ひとりの夜を短歌とあそぼう』穂村弘 角川学芸出版

市立図書館から借りた短歌に関する図書



学校にあった短歌に関する図書

